

1939年度大接近期に於ける

火星協同観測結果報告 (IV)

遊星面課長 伊 達 英 太 郎

第 2 區

〔エリスレウム海、マ丨ガリチフェル灣、オ丨ロラ灣附近〕

(10°~70°)

マ丨ガリチフェル灣——この地區で最も眼を牽く模様は、メリデヤ=鬚に西隣するマ丨ガリチフェル灣であらう。南で擴がり、北で細くなつてゐる圓錐形のこの入江は、8浬級の望遠鏡にも認め得られる模様だが、今回の對衝には非常に淡く、バンドラ海峡程ではなかつたが、それでも、15浬で認めるのに骨が折れた位、淡い存在であつた。バンドラ海峡の消失した(又は淡くなつた)のと關聯してゐるのかも知れない。形狀は37年度と大差無い様である。マ丨ガリチフェル灣に北接せるオキジャ淺瀬も、37年度に比し淡いのは否めない。マ丨ガリチフェル灣とオ丨ロラ灣に挟まれてゐるエオス島は、筆者の26浬にも確實に認め得なかつたが、ここより南東へ伸びてゐるパイレ地方と同濃度に見られた。

オ丨ロラ灣は、他の模様同様、37年度に比し明らかに淡いが、マ丨ガリチフェル灣よりは濃く見られた。37年、カブリ崎が明白だつた爲、恰も二個の黒斑の集合の如く見られたオ丨ロラ灣は、今回は、カブリ崎が不明だつた爲、單一の大きい模様に見られた。

南方へ行つて、南半球特有の圓形大陸アルジレ I, II は、今回の對衝に於て明瞭に認め得たが、豫想程冴えた色相を呈してゐないのには案外の感を懷いた。又、形狀も判然とした圓形でなく、周圍の“海”と云はれる青灰色の部分が入り込んで、一帯にボヤツと輪廓の無い不定形を呈しており、特に注目すべき事は、急報にも發表された如く、8月20日(中平良之介氏は18日より認めておられた由)の筆者の観測に、エリスレウム海の南方、南極冠に北接して(尤も、球面の端の近くだから、事實は相當離れてゐる筈)長三角形の帶黃白色の擴がりが見られた事である。これが果して雲であるか、火星表面に直接起つた變化であるか? 疑問で、其後天候の都合で確認し得なかつたが、これに似た現象が、これ迄に屢々種々の観測者によつて同位置に發見され、アントニヤヂ氏はこの白色物質に Mons Argenteus (Mons は山の意) と命名して、彼の著書 “La Planète Mars” に發表し、同書の火星地圖に記載してゐる。即ち、スキヤバレイ氏が1877年に發見したのを最初に、1892年にはバ丨ナ丨ド、シーペ丨ル、ハセイ、キャンペ丨諸氏が、1894年にはバ丨ナ丨ド、キャンペ丨兩氏が、1907年にはエ

分程の濃さと太さを呈してゐるが、これはガンジス運河そのものが顯著になつたものでなく、ガンジス、イステル兩運河を境界とする細長い地方が著しく濃度を増した爲と見られる。37年度にも、ガンジス、ヤムナ兩運河に囲まれた地方(クサンテ地方)が濃くなつたのと對照して興味あるフィチュアである。

次に矢張りオリョラ灣に連つてゐるベチス運河とその起點を爲してゐるイウベクタ泉が、今回も、37年度同様、全然認め得られなかつた事である。この運河と泉とは、アントニヤチ氏に依ると、大接近の際には特に濃く、全模様中、最も濃く記録されてゐるので、筆者も26糎の全能力を盡して注意して見たが、シーイングが理想的でなかつた故か知らぬが、全然認められず不思議に思つてゐる。これは1924年度には、相當小さい口径にも認められてゐるから、26糎鏡には明瞭に見えるべき筈だが、見られなかつた事は、餘程氣候状態が悪かつたか、或は消失したかによるものと思はれる。

第 3 區

〔ソリス湖、タウマジャ地方〕

(70°~120°)

報告毎に述べる様に、火星面としては最も淋しい部分で、15糎鏡以下の小口径には殆んど何等見るべきものがない。只、今回の對衝は、南半球が良く見られたので、赤道以南に位置するソリス湖(俗に火星の“眼玉”と云はれるもの)が殆んど Disk の中央を通過するので、この地區唯一の探究目標は、勿論、このソリス湖の分解に向けられた。

處が結果を見ると、正直な所、このソリス湖の分解は1937年度の方がよりよく観測された……と云ふ皮肉な結果になつてゐる。と云ふのは、低空の爲のシーイングの悪化もあるが、前田、渡邊兩氏の観測が無かつた爲とも云へる。事程左様に37年度に於ける兩氏の活躍は目覺しいものだつた。

さて、ソリス湖と、その周圍を取圍むタウマジャ地方の状況は如何であつたか？ ソリス湖は勿論單一の簡単な圓形をしてゐるものではない事は、1937年度に明瞭に判明してゐたし、既に、ソリス湖が2—3の斑點の集合から成つてゐる事もよく判つてゐたが、今回は恰度、Disk の中央を通過したので其正しい形態を捉へたいと念願してゐた。今回も矢張りソリスは斑點の集合に見られた。これは25糎級では明らかに見られた事で、12糎を使用した京都の樋上敏一氏も分離しておられる處を見ると、淡いながらも、この斑點の分離は、案外容易だつた事が判る。これから推して、ロエルやスキヤパレリ氏が單なる圓い圓形に見てゐる事が妙に思へる。即ち、使用口径の極限以上の細い二重運河を分解してゐ乍ら、ソリスを單なる圓形に見てゐる矛盾さを、著者はどうしても解き得ないのである。

今回の観測結果では、ソリス湖自身は、一寸琵琶湖を思はせる瓢箪形で、東に細長く、西に太く、大體 -25° の線に沿ひ、東西は 80° から 100° の位置を占めてゐる。そして差し詰め宇治川と思はれる位置に、ネクトル運河がある。但しこのネクトル運河は宇治川の様に蜿蜒と伸びず、直ちにエリスレウム海に注いでゐる點が一寸異つてゐる。ソリス湖は、アントニヤチ氏の火星圖によると、天界第117號第90頁にある如く、4つの斑點(ヘリ低地、ベスタ低地、フルゴリス低地、フェビ低地)から成り、その先端(東端)に小さい2つの泉(タウリ泉、ルシウ云ふ風になつてゐるが、今回の本會々員の観測では、上記フルゴリス、フェビス港)がある。この2斑點は分離したが、ヘリ、ベスタ兩斑點を1つに見、又、小さい2つの泉は見落してゐる。が、これはアントニヤチ氏の使用望遠鏡の口径が83浬であるのと比較すると見られなかつた事も頷ける。このソリス湖の分離に成功したのは岡林氏の32浬、樋上氏の12浬、筆者の26浬の3機であつた。

次に、ソリス湖を取巻くタウマジア地方(即ち東南側はエリスレウム海、北西側はフェシス運河、フェニクス湖、ノクス運河、チトニウス湖に囲まれた地方)に存在する運河の観測だが、これは、流石に今回の接近は、殆んど鳥瞰的に觀望し得た結果、37年度の追隨を許さず、少く共3本の運河は確實にキャッチし得た事は、特筆すべき收獲である。即ちネクトルを始めとして右廻りに、アムプロシヤ、ベシス、エオスフロスの3運河が確實にキャッチ出来、岡林氏はこれ以外にカリドンを見ておられる。

メラス、チトニウス兩湖とフォエニシス湖を兩側に、グルツと取巻かれた圓形地方の眞中に、“火星の眼玉”然と收まり反つたソリス湖の悠大な景觀は正に火星觀測の壓巻であらう。尙、このタウマジア地方1939年度の一變化は、ソリス湖の南西方ベシス港から北方フェニシス湖へフェーシス運河が復活したことで、この運河は、1909年から1924年を除いて近年認められぬ位淡くなつてゐたもので、今回20浬級に明らかに見られた。

ソリスの南方、南極を取巻くオーストレール海の詳細はキャッチ出来なかつた。

次に反對側の北半球運河地帯一圓は、何度も記した様に、Diskの下端近くになり、殆んど觀測絶望の状態であつた。尙、この附近のDetailは37年度の、特に渡邊恒夫氏の觀測に詳細に記録されてゐる。

只一つの注意すべき現象は、ガンジス運河の兩側カンドル地方が特に白く輝いてゐた事であらう。(未完)

御 願 ひ

都合により、當分の間、急ぎの郵便物は皆、下記へ願ひます：

滋賀縣 草津町 山 本 一 清